

自 己 評 価 表

(愛媛県立北宇和高等学校三間分校)

学校番号(43)

教育方針	校訓「協和・責任・健康」の精神に基づき、豊かな人間性と社会人としての資質を備え、地域文化の創造と産業の発展に貢献できる人材を育成する。	重点目標	「一人一人のよさを見つめ伸ばす教育の実践」 ～ 社会的自立力の育成を目指して ～
------	---	------	---

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学校経営	地域との結びつきを大切に した教育の実践	地域の教育力を生かし、地域行事やボランティア活動への一人1回以上の参加を目標とする。ホームページの適時更新、家庭通信の発行により、中学生、保護者や地域住民等への情報発信を積極的に行う。	B	コロナウイルス感染症拡大の影響で、地域行事や各種のボランティア活動が縮小されたり、中止となったり、生徒が地域と交流する機会が少なくなってしまった。このような状況であったが、小学生と本校生徒の交流事業で、黒米の稲刈り体験を実施したり、中山池公園のイルミネーション飾りつけボランティアなどに参加したりするなど、限られた中でも積極的に活動を行った。	今年度はあまり実施できなかった北宇和高校と協働した地域行事への参加やボランティア活動について、積極的に取り入れていきたい。コロナウイルス感染症の影響が今後も継続する可能性もあるので、Teamsなどの通信アプリを活用したりリモートによる活動も計画したい。
	働き方改革の推進	教職員がそれぞれの個性を発揮し、生き生きと活躍できる職場環境を整備する。 ICTを活用し業務の効率化を図り、勤務時間外在校等時間の削減を目指す。1か月の勤務時間外在校等時間が45時間以上の教職員数0を目指す。 評価基準 A 0人 B 5人以下 C 10人以下 D 15人以下 E 16人以上	C	教職員に対するストレスチェックの結果から、本校教職員のストレスについては、県平均と比較しても少ない状況となっている。先生方一人一人が、ワークライフバランスをとりながら個性を発揮し活躍できていると考えられる。 勤務時間外在校等時間については、45時間以上の教職員数は7名前後となっている。担任や部活動等で土曜日、日曜日の指導を行っている先生方の時間数が多くなっている。	ICT研修を今年度以上に充実させ、業務の効率化をさらに推進していきたい。職員会議等の議題を精選し、会議時間の短縮を行いたい。 働き方改革を推進していくためには、教職員の意識改革を行うことが不可欠である。時間外労働時間を削減することが、教職員のストレス軽減につながり、より効果的な教育活動を行うことが可能になることを研修等を通して周知していきたい。
学習指導	学習習慣の確立	進路意識や目的意識を持たせ、学習意欲の向上を図り、授業と家庭学習との学習サイクルの習慣化を図る。また、適切な学習課題の出し方等の工夫改善を行う。 一日2時間以上の家庭学習習慣の定着を目標とする。 評価基準 A 2時間以上 B 1時間30分以上 C 1時間00分以上 D 30分以上 E 30分未満	C	各考査前に家庭学習時間調査を行ったが、全校平均84.0分であり、マニフェストで設定した1日2時間の目標時間を大きく下回っている。感染症予防に努める中で、授業の実施形態をICTを活用する中で、模索することが続いており、より効果的な学習、主体的な学習につながるように授業計画を立てているが、学習習慣の確立につなげることができていない。 進路意識等を高め、ICTも十分に活用しながら学習課題の改善を目指した取組を進めていきたい。	学習への目的意識を高めるとともに、授業→家庭学習(復習・予習)→授業のサイクルを習慣化できるように、授業の満足度を高めるとともに、学習課題の工夫改善を継続する。 ICTを活用した学習指導の在り方を研究し、家庭学習が充実していく課題提示方法について研究し、生徒の主体的な取組につながるような授業改善の必要がある。
	読書指導の充実	SHR時に読書タイムを設定し、読書する習慣を身に付けさせる。 図書委員会活動を活性化させ、興味、関心を高めるために図書館の環境整備を図る。 評価基準(月平均の図書館利用日数) A 10日以上 B 5日以上 C 3日以上 D 1日以上 E 0日	B	読書タイムの実施や、教科内での図書館利用指導や感想文の作成等を通じて、図書館利用を推進したり、図書委員を通じた図書紹介を行ったりなどし、利用者の増加につなげることができた。	引き続き、日常の図書委員の活動を地道に行い、本の面白さをアピールするようになるとともに、癒し空間としての存在価値を持たせられるようにしたい。
	教科指導の充実	課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点に立って、主体的・対話的な授業形態や授業方法等の工夫・改善を図るため、教員のスキルの向上に努める。 よく分かり、学び合う授業を実践して、生徒一人一人良さをみつけ伸ばす教育を推進する。 評価基準(ICT活用・授業改善研究授業・研修会等実施) A 4回以上 B 3回 C 2回 D 1回 E 0回	B	生徒に一人一台端末が配布され、生徒がコンピュータを活用することが日常的になった授業の取組ができている。家庭でも授業の課題に容易に取り組むことができ、これまでの学習を改善する取組ができている。教材の提示だけではなく、教師と生徒の双方向のやり取りが実現できている。	情報端末を活用しての、生徒による主体的な学びや活動、共に学び合えるような授業形態や授業方法等の工夫・改善に今後も引き続き取り組んでいく。学習の成果物を集団で共有できる取組を考えていきたい。
	言語活動の充実	「話す力」、「聞く力」、「話し合う力」等を育成する場面を、教育活動全般を通して、意識的に数多く設定する。 ペア学習や班別学習等の協働的な場面を設定し、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、深い学びにつなげる。 評価基準(成果発表会及び協働的活動の回数) A 5回以上 B 4回 C 3回 D 2回 E 0~1回	A	総合的な探究の時間のみならず、各教科・科目において、協働的な学習や発表の場面を設定し、新たな課題を発見していく探究活動の過程を重視した活動がよくできている。各学級で多い生徒は5回を超える発表の機会があり、入学当初より大きく成長することができていると感じる。	総合的な学習(探究)の時間を中心に、「話す力」「聞く力」「話し合う力」等の育成に力を注ぎ、各教科での活動にとどまらず、学年を超えた活動、学科を超えた活動など活動の幅を広げられる取組をしていき、コミュニケーション能力の向上につなげていきたい。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

	基本的な生活習慣と規範意識の確立	さわやかで明るいあいさつのできる生徒を育成する。 生徒自ら、生活のリズムを作り出せるよう指導を繰り返し、安易な遅刻や欠席をなくす。 日頃から高校生らしい清潔で端正な身だしなみを心掛けさせ、身だしなみ指導では違反の繰り返しをなくす。	B	新型コロナの感染拡大のため、ワクチン接種やその副作用、また後半にはオミクロンの急激な拡大にともない、不安を感じて欠席する生徒もおり、生活のリズムに乗りにくい1年であった。 身だしなみ指導については、数名の生徒であるが、指導を繰り返し受けている。生徒主導で規則の変更を行うなど生徒の自覚を促す取組も行った。	本年度規則の変更を行ったように、生徒自らが、生活習慣や身だしなみに関する意識を高めるために、全校集会や委員会、生徒会の活動の中で考える場を持たせる。
		授業開始のチャイム前に全員着席し、落ち着いた雰囲気の中で学習できるようにさせる。 校則や社会のルールを守ることで、自分や他人の命や心を大切に意識を養う。 登下校時の交通事故0件、交通違反0件、携帯電話やスマートフォン等でのいじめ0件を目指す。	B	授業開始前に全員着席して待ち、落ち着いた雰囲気の中で学習することに関しては、できているところとそうでないところの差がある。 規範意識が低い生徒も見られるが、友人や弱い立場の生徒に気を配る様子が見える。 交通違反や事故、いじめは認知しておらず0件である。	授業開始を全員着席して落ち着いた雰囲気ですぐに授業に取り組み始めるように、続けて指導を行う。 規則に対してルーズにならないように担任、学年団、また、他の教員が情報を共有し、共通認識を持って指導する。
生徒指導	生徒理解と家庭や地域との連携の充実	個別面談を年3回以上実施し、生徒理解に努める。 家庭との連携を深めるとともに、教育相談体制を充実させ、生徒一人一人に寄り添い、きめ細やかな心の通う生徒指導の実践に努める。	A	年間に生徒一人3回以上の面談を実施することができた。 また、養護教諭や教育相談に係る教員と連携を取り、一人一人に寄り添ったきめ細かな指導体制がとれた。	期日が決められた面談では、単に実施するだけでなく、生徒の本音が聞けるようさらに工夫をしていきたい。
		生徒の学校生活の様子を記録に残し積極的に公開すると共に、保護者や地域との連絡を密に取り、信頼関係を結ぶよう努める。 地域の環境美化や行事への参加、お遍路文化の継承など、三間地域に貢献できる活動を充実させる。	A	担任が中心となり生徒の記録をこまめに取り生徒の悩みなどに対応した。また、学年主任やその他係の教員と情報の共有を図り、保護者が相談しやすい環境を作るための努力ができた。 コロナのため限られた機会であったが、多くの生徒が、地域のための活動に参加した。	学年団はまとまりがみられ、家庭との連携も取れている。それに加えて、今以上にスクールカウンセラーや外部の専門家などの方々と連携できる体制が取れればと思う。 来年度も多くの活動機会に参加できるよう、生徒に情報発信をしていきたい。
	部活動等の活性化	部活動に対する生徒の意欲を高めさせる。 部活動加入率90%以上（評価基準） A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 75%以上 E 75%未満 県総体出場（評価基準） A 10名以上 B 5名以上 C 3名以上 D 1名以上 E 0名 県新人大会出場5名以上（評価基準） A 5名以上 B 4名 C 3名以上 D 1名以上 E 0名 県高文祭出場4名以上（評価基準） A 4名以上 B 3名 C 2名 D 1名 E 0名  地域の特色に応じた部活動やその他の活動を活性化させ、生徒の活躍の場を広げる。	C	部活動の加入率は87.5%であった。しかし、運動部への加入率は下がってきており、毎日活動する部活動には入部しなかった。そのために、部活動の改善を行った。 県総体への出場者は6名、県新人大会への出場は1名にとどまった。 高文祭への参加もオープン参加の1名であった。 残念ながら部活動への意欲は低くそのためにも人数も増えず、また意欲が下がるという悪循環である。 しかし、部活動というところから離れると、地域やその他の校外での活動には積極的に参加する生徒も多く、活躍の場を広げているといえる。	改善を行った部活動で、どのような状況になるか詳しく分析をしたい。また、本校と合同で活動する予定もあり、生徒にとってプラスになる活動のあり方を探していきたい。 生徒が校内外で、部活動以外の活躍できる場を本年度以上に充実させる。そのためには、その機会を確実に生徒に提供し、その活動の意義を理解させ、生徒が進んで参加する環境を整えていきたい。
人権教育	生徒の人権意識を深める活動の実施	人権・同和教育ホームルーム活動や生徒人権委員会の活動を充実させ、「人権だより」や「人権壁新聞」の発行を通して、人権意識の高揚を図る。	B	人権・同和教育ホームルーム活動では、各学級担任が十分に準備して取り組んだ。「人権だより」では、生徒の人権作品や、人権関係行事の振り返り等を紹介できた。「長島愛生園日帰り研修」で学んだことを、「人権だより」「人権集会」に活かすことができた。「人権壁新聞」では、人権・同和教育ホームルーム活動の感想を紹介できた。	「人権壁新聞」の内容を充実させる。「人権だより」に、生徒や保護者の意見を載せるなど、工夫する。「三間町日帰り研修」での学びを、人権関係行事等につなげる。
		全校面接や悩みに関するアンケートを実施し、学校が安心して生活できる場となるよう相談体制を充実させる。	B	各学級担任が、悩みに関するアンケートにより生徒の悩み等の状況を確認し、副担任と協力し、全校面接等の面談を行い、より具体的な状況の把握と、助言等を行うことができた。さらに、必要に応じて、経過観察もできた。	生徒の心の悩みに対する指導・支援体制の一層の充実を図る。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

進路指導	キャリア教育指導の充実	総合的な探究の時間（コスモスタイム）・課題研究の充実を図り、自己実現の意識と社会人としての実践力を高めながら、望ましい職業観・勤労観を育成する。	B	今年度より1年生の就業体験は4日間で実施し、一人1企業の中、それぞれの職場で地域の社会人から多くのことを学び、働く意義を考える良い機会となった。 2. 3年生は進路探究・進路実現に向けて取り組んだが、生徒自らが高い進路意識を持ち、主体的に動く活動につなげることができなかった。	生徒の実態を考慮した就業体験場所の選択や開拓を図り、キャリア教育の一層の充実を図る。 より実践的・体験的な講座やワークショップを取り入れ、意欲的に取り組ませることで、社会的実践力につなげていきたい。
		生徒会、家庭クラブや農業クラブ、委員会活動において、一人一役以上を目標に、自主的・実践的な活動を展開し、自己有用感を育む。	B	3年生を中心に多くの生徒がそれぞれの立場で学校の活性化に寄与することができ、その活動の中で自己有用感を高めることができた。	生徒の自主的で主体的な活動を目指し、担当課とも連携して、「自分たちで考え、動く」雰囲気作りを目指したい。
		生徒が自己の将来を見据えた生き方考え、主体的に進路を選択できるよう系統的な指導計画を基に進路ガイダンスや面接指導を充実させる。 <u>評価基準（進路ガイダンス実施4回以上）</u> A 4回以上 B 3回 C 2回 D 1回 E 0回	B	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、5月実施予定の3年生のガイダンスは中止となったが、残り3つのガイダンスは実施することができた。自己の進路を考える良い機会となった。 学校全体で3年生の面接指導に当たることで、生徒は自信を持って進路実現に向けて努力することができた。	様々な講座を通して、主体的に進路を選択できるような支援体制を継続する。 個々の特性に応じた進路指導や支援をする中で、生徒のコミュニケーション能力も高めていきたい。
個に応じた進路指導の充実	資格・検定の取得を奨励し、3年間で1資格（3級以上）以上の取得を目指す。目標に取り組む経験を通して、達成感を味わわせ、自信を育む。 <u>評価基準（1資格以上の取得率）</u> A 100% B 85%以上 C 75%以上 D 70%以上 E 70%未満	C	3年間で1資格以上の取得という目標は、80%の生徒しか達成できなかった。資格取得に向けたチャレンジは全員が行うことができたが、取得に対する意識が低い生徒もいるため、改善策が今後の課題である。	3級以上の資格取得が難しい生徒や資格取得に対する意識の低い生徒も増えており、資格の精選や資格取得のための補習の充実など検討していきたい。	
	「3年生10人面接」等を通して進路意識を高め、卒業時の進路決定率100%を実現する。 <u>評価基準</u> A 100% B 90%以上 C 80%以上 D 75%以上 E 75%未満	A	学年全体で「面接ノート作り」や10人面接を実施することで、進路意識を高め進路実現へ前向きに努力することができた。特別支援教育課や関係機関と連携をとることで、就職・進学ともに、希望する進路先への内定、合格を果たした。	3年間を見通したキャリア教育計画をさらに充実させ、社会的自立実践力を身に付けさせたい。そのためにも、早い段階で進路意識を持たせる場面を増やしていきたい。	
安全教育と防災教育	学校安全に対する意識を高め、災害発生時に的確な行動ができるよう、実践的・組織的な活動を充実する。 A 5回以上 B 3回以上 C 2回 D 1回 E 0回	A	避難訓練・シェイクアウト愛媛など今年度も計画的に防災行事を行った。例年実施している、三間認定保育園との合同避難訓練は、コロナウイルス感染症のために実施できなかったが、防災行事として未来の消防団加入促進事業を実施した。	地域防災の観点から、認定こども園、小中学校と連携した防災活動を計画したい。コロナウイルス感染症が収まっていないことも考えられるので、通信アプリを活用した防災に関する交流学習についても検討したい。	
	防災意識の向上を目指すとともに、地域の防災活動や災害時の支援活動において、自らの役割を判断し、積極的に行動できる生徒を育成する。防災士講座受講者5名以上を目指す。 <u>評価基準</u> A 5名以上 B 3名以上 C 2名 D 1名 E 0名	B	今年度の防災士講座受講者は4名、うち1名合格。他の3名は再受験にチャレンジする予定。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い講座が取りやめとなっている。	感染症防止の観点に立った防災教育の取組、生徒の実態に則した体験的学習など内容を工夫し、正常性バイアスの克服に努めていく。	
	健康な生活を送るために必要な知識を身に付けさせ、自ら実践する力を養う。 心身の健康に留意させ、出席率94%以上を目指す。 <u>評価基準</u> A 94%以上 B 92%以上 C 90%以上 D 88%以上 E 88%未満	B	健康診断の結果、治療が必要な生徒に対して個別に保健指導を行い、健康に対する意識の高揚を図った。また、毎月の保健だよりでは、対季節に応じた健康に関する内容を取り上げ、情報発信した。 出席率は93%だった。	生徒保健委員会で行った睡眠に関する取組を発展させ、活動内容の工夫をしたい。活動を通して、委員の意識の高揚と、他の生徒たちに健康について正確な知識や理想的な生活習慣を浸透させることを目指したい。	
特別支援教育	一人一人に応じた指導・支援の充実	B	一人一人の障がいの状態や教育的ニーズに対応して、合理的配慮を行っている。また、各教科においてパワーポイントを使用して、学習内容が理解されやすいよう図や資料・写真等が明確に提示されるなど、視覚的な工夫が実践されている。（ユニバーサルデザイン） 他教科の教員と学習支援員を、必要に応じて複数で授業に配置しており、学習支援の充実を図れた。	障がいの種類の多様化と一人一人の教育的ニーズに対応した、合理的配慮の工夫と提供に努め、組織的かつ継続的に実践を進めていく。 教職員を対象とした研修を年2回以上実施することで、スキルアップにつなげる。	
	自立と社会参加に向けた教育の充実	A	「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」「自立活動の個別の指導計画」の作成を積極的に行い、各学期ごとに保護者の確認の下、PDCAサイクルを取り入れている。また、3年生については、本人・保護者の合意に基づき、就労先への引継ぎを行っている。 今年度は、特別支援教育関係の校内研修を2回実施し、教職員のスキルアップに努めた。	引き続き「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」「自立活動の個別の指導計画」の作成を継続的に実施する。また、進路決定と卒業後の安心した生活を確保するために（切れ目ない支援の充実）、関係諸機関と保護者との連携の中で、支援に対する情報の共有に努める。	

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。